

水俣病に考をよせる

(2)

「沿岸地区に奇病患者がやむぎも発生しているようだ。どうしても診断がつかない」と新日室水俣工場付属病院の野田医師が、果水俣保健所に血相を委せて飛び込んで来た。三十一年五月一日のことである。伊藤保健所長(現在、県医務課長)にも判断はつかなかった。そのうち付き添っていた患者の妻も発病した。伝染病の疑いもなかった。保健所、付属病院の医師たちが相談のすえ、

奇病の発生

とりあえず「日本脳炎」の疑いと診断、市立病院の隔離病棟に収容した。県衛生部では現地に係り員を派遣、患者の発生状況、現地の環境、水質、食品などを調査した。船大医務部からは長野、勝木の調査員が病理解明のため、診察、検査を行なったが、病名の診断はつかなかった。いって世

界の奇病といわれる「水俣病」が明らみに出た。二十八、九年ごろから、水俣湾沿岸の漁村で「近ごろはネコが踊りをも手をつかまるよ」という



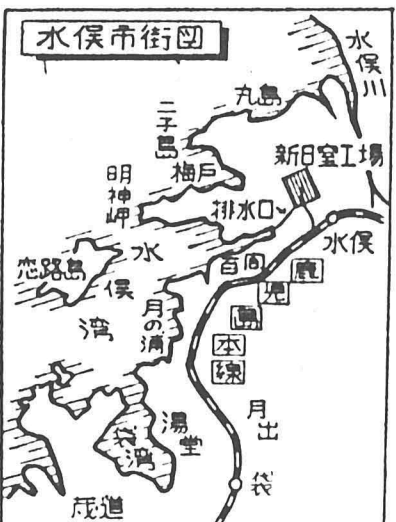
「何か」をしきりに求めようとするのだが……胎児性小児マヒ(九歳)知能指数は二歳くらいがやっと。

診断つかぬ伝染病

漁民を襲う死の恐怖

うわさが流れた。この病のとおり海に面した月の浦、湯堂、出月、明神地区などはネコがつきつき

い悪いの着てあれ症状は変わりない。狂死したネコの症状とも似ている。医師は首をかきつけたが、脳しよよう、中風、脳海遊などの診断で片づけた。保健所を中心にして、市立病院、医師会、付属病院で、水俣病対策委員会をつくり、調査を進めた結果、医師たちが過去のカルテを調べてわかった。二十八年十一月に第一号が発病、二十九年に十二人、三十年に九人、三十一年は四月までに十一人、計三十三人が発病していた。しかも漁民を被爆のどん底に追いついたのが、三十四年九月には隣の蘇北郡津奈木町で発生した。つづいて湯浦町、蘇北町にも飛び火。さらには隣の県境をまわって鹿児島県出水市でも患者が出た。不知火海の沿岸ほとんども伝染病が来た。大口市ではネコが狂い死にしている。



に狂い死をまじめた。——だがこのときすでに漁民は漁民たちの身体に侵入していたのである。手届けを禁止、魚貝類を食べないよう野が狭くなり苦しむが、重う動じた。この結果かどうか、人たちが

三十二年には一人の患者も出なかつたのが、三十四年九月には隣の蘇北郡津奈木町で発生した。つづいて湯浦町、蘇北町にも飛び火。さらには隣の県境をまわって鹿児島県出水市でも患者が出た。不知火海の沿岸ほとんども伝染病が来た。大口市ではネコが狂い死にしている。

作家の水上勉もその作品「潮の牙」の中で、だが奇病の原因が早く究明されないかぎり、不知火沿岸漁民の生活保護を国家が考えないかぎり、まだまだ第三、第四の血の雨がふるかもしれない。と奇病への怒りをぶちまけ、貴しい漁民への愛情を吐露した。

水俣病と認定されたものは胎児性小児マヒを含めて百十一人。うち死は三十八人、三四野という水俣市以外でも九人の患者がでた。水俣市内でとくに多いのは月の浦、湯堂、出月の三地区。いす

患者の発生は水俣市内内だけではとまらなかつた。三十一年十一月県衛生部は水俣湾の魚貝類の水質を調査し、魚貝類を食べないよう野が狭くなり苦しむが、重う動じた。この結果かどうか、人たちが